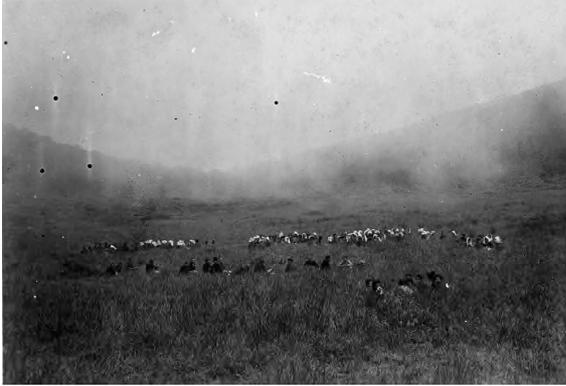


鹿児島島の地質33 記録写真から読み取る桜島大正噴火 地質担当 鈴木 敏之

桜島は、平成26(2014)年1月12日で、大正3(1914)年の大噴火から100年を迎えます。今回は、県立博物館が所蔵する桜島大正噴火の記録写真から、噴火当時の様子を振り返り、「大正噴火の驚異」に迫ってみたいと思います。

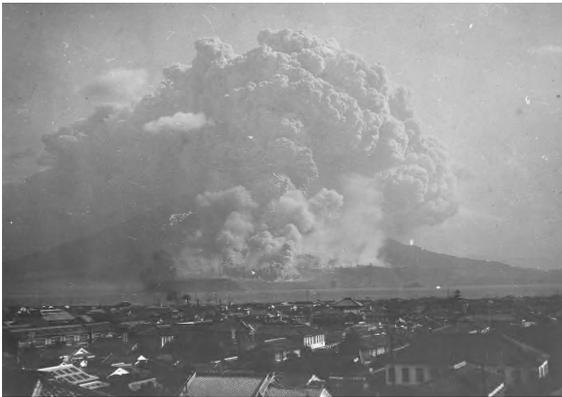
1 噴火前



桜島北岳の火口底（大正2.11.31撮影）

現在は、登山禁止となっている桜島ですが、学生たちが北岳の火口底の草原に遠足に来ています。（写真は噴火約1か月半ほど前に撮影）大正3年の噴火前年には、霧島山麓で地震が頻発したり、高千穂峰（御鉢）が数回噴火したりしています。

2 大正噴火の状況



城山公園より噴火を望む（大正3.1.14撮影）

大正3年1月12日午前10時5分大きな爆発音と共に黒煙を上げ、ついに噴火を始めました。噴火口は西側の山腹海拔約500mの引ノ平付近でした。続いて約10分後、東側山腹の海拔約500mの鍋山付近からも噴火が発生。山頂をはさみ、文明、安永年間のものと同じ両側面2地点の山腹噴火となり、噴火は次第に激しくなりました。翌日の午後になると、噴火の勢いは弱まりましたが、西側では午後8時過ぎから溶岩の流出が始まりました。



瀬戸海峡の接続の様子（大正3.1.27撮影）

溶岩流は、16日になると小池、横山、赤水の集落を埋め、ついに海中に流れ込みました。18日には^{からすじま}烏島周辺の海を埋め立て、翌日には烏島の所在も分からなくなりました。

東側の火口からも13日の夜、溶岩の流出が始まり、有村、脇、瀬戸の集落を埋め、瀬戸海峡の海へ流れ込みました。この溶岩は2月1日午後4時頃、幅約400mの瀬戸海峡を埋め、桜島と大隅半島を陸続きにしました。

3 桜島からの避難・救助

住民の中には、有感地震や地鳴りで異変を感じ、噴火開始前に避難した人もいたようですが、島内に留まっている人も多数いました。人々は逃げまどい、船を奪い合ったり、海に飛び込んだりする人もいて、救助船が



避難・救助（大正3.1.12撮影）

到着するまで混乱したそうです。中には「毒瓦斯や海嘯（高潮）が襲来する」等のデマにより一層混乱した様子が爆発記念碑などの碑文に残っています。